

ラナンキュラスのかぎ芽苗の9月定植作型における育苗方法

○中村 薫・永友佑樹・郡司定雄¹⁾
(宮崎総農試・¹⁾宮崎総農試菓草)

【目的】

ラナンキュラスは、球根による増殖が一般的であるが、球根から萌芽した芽をかぎ取って増殖することも可能である。ここでは、その新增殖法の実用化、特に早期定植による球根収穫量の増加を狙って9月定植の作型での育苗方法について検討する。

【材料および方法】

実験には、品種「エムホワイト」のSサイズのメリクロン球を用いた。球根の吸水処理は2012年7月16日に、細粒ボラ:パーライト:焼土=5:2:3の混合用土を充填した7.5cmポリ鉢に球根を埋め、5℃暗黒条件で行った。7月21日に芽出し処理として10℃暗黒条件で5日間静置し、7月26日から萌芽処理として20℃10時間日長のインキュベータ内に移した。8月16日に、萌芽した芽のうち、根が着いた芽を球根からかぎ取って7.5cmポリ鉢に鉢上げした。用土は野菜用育苗用土:小ボラ=2:1の混合用土とし、鉢上げ後は液肥特2号400倍を4回施用した。

鉢上げ後、夜冷育苗ハウスにおいて、夜間(16:30~8:30の16時間)を10℃の夜冷庫に入れ、昼間(8:30~16:30の8時間)は雨よけ育苗ハウスで育苗を行う夜冷育苗区と、終日雨よけ育苗ハウスで管理する雨よけ育苗区の2つの試験区を設け、30日間育苗した。試験規模は1区12株で3反復とし、育苗終了時に葉数と最大葉柄長を計測した。定植は9月15日に農P O系フィルム被覆ハウスに行った。栽植様式は畝幅135cm、株間20cm、条間20cmの3条植えとし、施肥量は成分でN-P-K:15kg/10aとした。

定植後は1区9株の3反復で区を設けたが、雨よ

け育苗区は育苗終了時の正常苗数が少なかったため、1区7株3反復で調査した。定植後開花した1番花の形質は立ち毛状態で調査した。調査後、花は摘み取り、その後栽培終了まで伸長する花茎の蕾は開花前に摘み取った。地上部が枯れ上がった後に球根は掘り上げ、乾燥後重量を計測した。

【結果および考察】

かぎ芽鉢上げ時のかぎ芽の葉数は2.4枚、最大葉柄長は5.4cmであった。定植時の成苗率は雨よけ育苗区が低く、57.9%であったのに対し、夜冷育苗区は92.1%であった。しかし、正常に生育した苗の葉数等には、有意差は認められなかった(表1)。定植後、雨よけ育苗区は生育が停滞し、枯死株および抽だい後に花茎が伸長を停止し、側芽が伸長する生育停滞株が発生し、正常に生育した株は33.3%であるのに対し夜冷育苗区は96.3%が正常に生育した(表2)。その後は夜冷育苗区のみを調査した。開花日は10月28日であったが、茎葉の黄変が早く、1月下旬より徐々に始まり、球根の掘上は4月下旬から開始した。得られた球根重は15.9gで、総球根数は4.5個であった。このことから、かぎ芽による球根増殖は十分可能であることが明らかになった。しかし、夜冷育苗により盛夏期の育苗はできても、定植後の茎葉の黄化が早く、9月中旬の定植はこの繁殖方法には適さないと考えられた。なお、本研究は農林水産業・食品産業科学技術推進事業「無病球根の効率的増殖を核とした有望球根切り花の生産流通技術開発」により行った。

表1 定植時の葉数および最大葉柄長

| | 葉数 ^z (枚) | 最大葉柄長 ^y (cm) |
|------------------|------------------------|-------------------------|
| 雨よけ育苗区 | 6.6 ± 0.3 ^x | 7.0 ± 0.2 |
| 夜冷育苗区 | 6.7 ± 0.2 | 7.1 ± 0.2 |
| 有意性 ^w | n.s. | n.s. |

^z 十分展開している葉の数

^y 最も葉柄が長い葉の葉柄長

^x 平均値±標準誤差(n=3)

^w t検定により、5%レベルでn.s.は有意差無し

表2 定植後の正常株数および枯死および生育停滞株数

| | 正常株数 (株) | 枯死及び 生育停滞株数 (株) | 合計 |
|------------------|-------------|-----------------------|----|
| 雨よけ育苗区 | 7 | 14 | 21 |
| 夜冷育苗区 | 26 | 1 | 27 |
| 有意性 ^z | | * | |

^z Fisherの正確確率検定により5%レベルで*は有意差有り